漢の長安城周辺の集落

陳　　力

これまでの漢の長安城に関する調査・研究の成果について，劉慶柱氏は都市プラン・宮殿官署の構造・手工業遺跡などの面で多大な成果を挙げたが，住民の生活などに関する発掘調査及び研究が不足していると指摘している[1)]。『漢書』巻二八上『地理志』に，

京兆尹（中略），元始二年戸十九万五千七百二，口六十八万二千四百六十八。県十二，長安，（中略）戸八万八百，口二十四万六千二百。

とあり，そのうえに，長陵・茂陵などの戸数も記録されている。『漢書』以外に，『漢旧儀』や『長安記』にも漢の長安城周辺の行政区の戸数を載せている。これらの記載にある人口数と漢首都圏の集落との関係はいかがであろうか，漢長安及びその周辺の人口分布はどのような特徴があるのか，さらに深く探求すべき点がまだ多数残っている。一方，漢の長安城の周辺に散在する諸陵県（陵邑）に関して，以前から学者に注目されてきたが，研究の空白はまだ数多く残されている。

人口・人口分布及び集落・集落分布は環境史において，きわめて重要なことである。漢の長安城の盛衰とその周辺地域の環境の変化との関係を考えるとき，これらの諸要素も把握すべきだとおもう。『中国文物地図集・陝西分冊』の出版によって集落関係の一部の基本作業がある程度可能になった。本論文は漢の長安城及びその周辺地域の集落・人口分布に関する資料を整理・分析し，これからの研究の方向を探りたい。

Ⅰ　前漢首都圏の範囲

1．前漢首都圏の範囲

漢代の首都圏は，中心都市（つまり漢の長安城）の周辺に，数多くの衛星都市（諸陵邑）が配置されていた。漢の長安城・諸陵邑のほかに，まだ数多くの中小集落が存在し，この三者は共同で前漢首都圏を構成していた。

陵邑のような衛星都市の建設は，当時「強幹弱枝」の政治的意図と「奉陵」の宗教的意図によって進められた。一方，当時の技術力・経済力・管理力で，百万人の都市を維持するのはとても不可能であったので，このように人口を衛星都市に分散することによって，以上の政治的意図と宗教的意図を実現したと同時に，都市の運営管理も簡単化になったに違いない。

佐藤武敏氏『長安』は前漢首都圏の範囲を言及している。佐藤氏は前漢首都圏を「大長安」と称し，この「大長安」の範囲について，氏は漢長安城及び各陵邑が「大長安」を構成していると指摘している[2)]。劉慶柱氏は，漢の長安城に政府機関・宮殿などが集中しており，長安城内で庶民が使える土地が限られ，漢の長安城の郊外にある七つの陵邑は住民建築用地の問題を解決したと指摘している[3)]。両氏の見解から，「大長安」，つまり前漢首都圏は，長安県・覇陵県・杜陵県，陽陵県・長陵県，安陵県・茂陵県・平陵県で構成されたことがうかがえる。

葛剣雄氏は前漢時代関中地区の人口を研究するとき，文帝が母親の薄太后のためにつくった南陵県，宣帝の父親である史皇孫の墓の所在地である奉明県，昭帝の母親の陵墓のある雲陵県

無断転載禁止

は諸陵邑と類似する目的で設置され，これらの県は「準陵県」と称するべきであると指摘している。雲陵はともかく，位置関係からみれば，たしかに奉明・南陵はもちろん佐藤・劉両氏がいう前漢首都圏の範囲内にあり，さらに同じく位置関係からみれば，陵県でもなく，「準陵県」でもない渭城県（秦の咸陽）も首都圏の範疇に入れるべきである。

漢の長安城の西に位置する戸県も前漢首都圏を構成する重要な部分だとおもう。『漢書』巻八宣帝紀に，首都に在住し，まだ一介の庶民であった宣帝の劉詢の行動範囲について，

数上下諸陵，周遍三輔，常困於蓮勺鹵中。尤楽杜・戸之間。率常在下杜。時会朝請，舎長安尚冠里。

とある。この記載から，前漢首都圏の庶民の行動範囲がうかがえる。上述諸先行研究とこの記載と総合してみれば，前漢首都圏には，長安城を中心とし，陽陵県・長陵県・安陵県・渭城県・平陵県・茂陵県・覇陵県・南陵県・杜陵県・戸県などが含まれていた。古くから，三輔全体は前漢首都圏を構成していたという意見があり，これはより広義的な前漢首都圏だと認識できる。

2．前漢首都圏の行政区分

前漢首都圏は漢代の後期において，行政的にそれぞれ京兆尹・左馮翊・右扶風の三つの部分に分けられていた。長安県・覇陵県・南陵県・杜陵県・奉明県は京兆尹に属して，長陵と陽陵の二県は左馮翊に属し，安陵県・渭城県・平陵県・茂陵県・戸県が右扶風に属する。各県の設置の大略は次のようである。

長安県　『元和郡県図志』によれば,「及（漢）高帝五年入関，復置長安県」，漢の長安城はその所轄である。史料によれば，長安に百六十の里があり，諸文献に残された里名は次のとおりである。

宣明里，建陽里，昌陰里，尚冠里，修城里，黄棘里，北煥里，北燠里，南平里，大昌里，戚里，函里，孝里，杜里。

木簡などの出土史料に次の長安の里名が載せている。

有利里，宜里，南里，假陽，棘里（陳直氏は棘里が黄棘里の略称としている），当利里，発利里（陳直氏は発利里つまり利里であるとしている），苟里，囂陵里，梁陵里，孝里，高都，外杜里などがある。

渭城県　『太平寰宇記』巻二六に

故渭城在今県東北二十二里渭水北，即秦之杜郵，白起死於此。其城周八里，秦自孝公至始皇皆都於此城，元鼎三年更名渭城。後漢省，併地入長安，故此城存也。

とあり，渭城県はそもそも秦の県であり，高祖元年渭城を新城県と名を改め，高祖七年県を撤廃し，その管轄を長安県に併合した。武帝の元鼎三年旧新城県の地域内で渭城県を設置し，前漢の末期まで存在していた。

戸県　首都圏諸県のなか，歴史がもっとも古い県である。秦の孝公は戸邑を県に改め，戸県と称す。

長陵県　高祖十二年（前195），長陵邑が設置された。『三輔黄図』巻一に，

漢高帝都長安，徙諸斉田・楚屈・昭・景及諸功臣於長陵。後世世徙吏二千石・高貲富人及豪傑兼并之家於諸陵，強本弱末，以制天下。

とあり，『元和郡県志』巻一に，

長陵故城在県東北三十里。初，漢徙関東豪族以奉陵邑，長陵・茂陵各万戸。其餘五陵各千戸。皆属太常，不隷于郡。

とあるが，漢の元帝のとき左馮翊にその所属が改められた。長陵県以外の各陵県もこのときその帰属をそれぞれ三輔に移した。長陵県の治所は長陵邑にある。考古調査によれば，長陵邑は今咸陽秦都区韓家湾郷怡魏村周辺（長陵の北側）にある。長陵邑の平面は長方形で，南北2200メートル，東西1245メートルがある[4)]。張永禄氏『漢長安城辞典』はその南壁は1194メートルがあり，北壁1300メートルがあり，西壁2040メートルがあるとしている[5)]。文献と考古調査によれば，長陵邑の城壁の東壁は建設されていない。

無断転載禁止

長陵には，入里，仁里などの里がある。

安陵県　恵帝は前187年死去し，安陵はかれを奉祀するために設置された。安陵邑は西周時代の程邑の地とされている[6]，その位置は安陵の北900メートルのところにあり，平面は長方形で，東西1548メートルがあり，南北は445メートルである。今，確認できる安陵の里名は高里，阪里だけである。

霸陵県　文帝九年（前171），帝陵建設のため，霸陵県を新設した。『大清一統志』巻一七九に霸陵の沿革を詳細に述べている。それによれば，

霸陵故城在咸寧県東。『史記』漢興以来將相名臣年表，孝文九年以芷陽郷為霸陵。『漢書』地理志，霸陵故芷陽，文帝更名。『三秦記』，秦穆公築宮於此，因名霸城。

『太平寰宇記』巻二四にも，

霸岸在通化門東三十里，秦襄王葬於坂謂之霸上。其城即秦穆公所築。漢為県，在東北二十三里霸水東霸陵故城是也。

とある。霸陵邑の場所についてはまだ定論はない。史念海氏編『西安歴史地図集』は『長安志』の記載によって霸陵邑の位置を今の新築鎮謝王村に比定し[7]，劉慶柱氏は霸陵邑は今の洪慶郷田王村周辺にあると指摘している[8]。文献及び出土資料に西新里などの二つの霸陵の里名が残されている。

陽陵県　『太平寰宇記』巻二六に，

陽陵城，故弋陽地。景帝改為陽陵。

とある。景帝の前元四年（前153）に陽陵工事とともなって秦の弋陽を陽陵に改称し，陽陵邑を建設した。陽陵邑は陽陵の東にあり，今の高陵県馬家湾郷米家崖北に漢代の集落遺跡があり，この遺跡はつまり陽陵邑の跡である。陽陵邑は長方形の形をし，今もその城壁の残跡が残されている。城壁の南壁は600メートル前後残され，東西両壁はそれぞれ60メートル前後残留し，北壁は涇水の氾濫によって破壊された。

南陵県　景帝前元二年（前155）年設立。南陵は漢の文帝の母親である薄姫の陵墓であり，南陵県は薄姫の陵墓を奉祀するために建設された。『三輔黄図』に，「文帝母薄姫南陵在霸陵南，故曰南陵。」とある。『大清一統志』巻一七九に，「南陵廃県在咸寧県東南。『漢書』地理志，京兆尹南陵，文帝七年置。『寰宇記』，南陵漢為県，在万年県東南二十四里白鹿原。後漢省。」とある。張永禄氏はその地は今西安市覇橋区狄寨郷大康村にあると指摘している。

杜陵県　宣帝元康元年（前65）杜県を杜陵県に改めた。杜陵邑は今の雁塔区三兆村西北にあり，長方形で東西2100メートル，南北約500メートルである。

茂陵県　『漢書』巻六武帝紀に，

（建元二年，つまり前139年）夏四月戊申，有如日夜出。初置茂陵邑。

とある。『漢書』巻二八上地理志上に，

茂陵，武帝置，戸六万一千八十七，口二十七万七千二百七十七。

とある。『水経注』に，

成国渠東逕茂陵県故城南。武帝建元二年置，宣帝県焉。

とあり，この記載は正しければ，茂陵県は宣帝期に設立されたのである。茂陵邑は今の瓦楂溝村を中心とする地域にある。遺跡範囲は東西約1500メートル，南北約700メートル。茂陵には東進里，陵里（長安の里名とする学者もいる）成忻里，果成里，陽耀里，顕武里などの里がある。

平陵県　設立した年代は不明。昭帝の元平元年（前74），昭帝は平陵に葬られた。『漢書』巻八宣帝紀に，

本始元年春正月，募郡国吏民訾百万以上徙平陵。

とあり，翌年の宣帝本始元年（前73），大規模の移民が行われたことを示している。同『漢書』宣帝紀に，

（本始）二年春，以水衡銭為平陵徙民起第宅。

とある。本始二年春（前72），天子の個人資財である「水衡銭」をつかって移住者に邸宅を築いたと記載されている。考古調査によれば，平陵邑はおそらく今の咸陽秦都区李都村を中心とする地区にある。遺跡の範囲は大きい，東西・

無断転載禁止

南北それぞれ1500～2000メートル前後ある。長藿里，徳明里，敬事里などの平陵の里の名前が残されている。

奉明県　『漢書』巻八宣帝本紀に

宣帝元康元年（前65），益奉明園戸為奉明縣。

とあり，『水経注』渭水に，

宣帝立奉明縣以奉悼園，在東都門外。

とあり，『陝西通志』巻三引宋敏求『長安志』に

長安縣北八里，奉明故縣是。

とある。これらの史料によれば，前漢の奉明県は漢の長安城の東側に位置する。しかし，宋敏求『長安志』巻十に，

（休祥坊）坊内有漢顧成廟余址。廟北漢奉明園，園北漢奉明縣。

とある。これによれば，奉明県は漢の長安城の南側にある。

史料によれば，奉明県には建設当時1600戸の人口があり，所轄は広明苑と広明成郷しかない。元帝永光四年（前40）年前後撤廃された。奉明県に善居里などの里がある。

Ⅱ　前漢首都圏の人口

1．漢首都圏の人口分布

長安

『漢書』巻二八上地理志上に

長安，高帝五年置。恵帝元年初城，六年成。戸八万八百，口二十四万六千二百。

とある。この人口数は，一般的に成帝元延末年（前２年から前９年）にとられた統計だと考えられている。この24万６千２百人は長安県ではなく，長安城に生活していると考えている学者もいるが[9]，これには従えない。

宇都宮清吉氏は「西漢時期の都市」において漢長安城の総人口は都市住民や官僚・軍隊を合計して，約10万９千４百21人と推測している。そのうち，都市住民が８万２千66人とされている。宇都宮氏の計算から見れば，約16万３千５百40人は長安県の長安城以外の区域に居住していたことになる。宇都宮氏のほか，楊寛氏は文献に記載されている「長安百六十里」について，この160里のなかの一部は長安城外にあるはずだと指摘し，馬先醒氏は『漢長安里第考』で函里が雍門外にあると考えている[10]。

長陵

長陵県（あるいは長陵邑）の戸数及び人口数について，文献に次のような四つの記載がある。前掲『漢書』地理志上に，

長陵，高帝置。戸五万五十七，口十七万九千四百六十九。

とある。（劉慶柱氏はこの記載にある「戸五万五十七，口十七万九千四百六十九」という数字を長陵県ではなく，長陵邑の人口数と考えているようであるが[11]，これに従いがたい。）

『文献通考』巻一二四引『漢旧儀』に，

漢興，立都長安。徙斉田・楚昭・屈・景及諸功臣家於長陵。後世世徙吏二千石・高貲・富人及豪傑兼併之家於諸陵。長陵邑万戸。

とある。『長安志』巻十四引『関中記』に，

漢諸陵皆高十二丈，方一百二十歩，惟茂陵十四丈，方百四十歩。徙民置県者凡七，長陵・茂陵各万戸，余五陵各五千戸，陵県属太常下隷郡也。守陵漑樹掃除凡五千人，陵令属官各一人，寢廟令一人，園長一人，門史三十三人，候四人。元帝時三輔七十万戸，始断，不復徙人陪陵。

とある。前掲した『元和郡県図志』巻一に，

長陵故城在県東北三十里。初，漢徙関東豪族以奉陵邑，長陵・茂陵各万戸。其余五陵各千戸。皆属太常，不隷于郡。

この四つの記載のなか，『漢書』地理志上の記載は明らかに漢末長陵県の人口であり，長陵邑の人口ではない。『元和郡県図志』巻一の記載は『関中記』の記録に類似しているが，その一万戸は「長陵故城」内に居住する人口としてとらえられる。また，『漢旧儀』も長陵邑の人口を一万戸としている。

葛剣雄氏の研究によれば，漢代関中地区の人口の増長率は約千分の六から千分の七である。もし，『関中記』に記載されているように，長陵県の設立の当時の人口は一万戸（三万六千人）とすれば，漢の成帝末になると，長陵県の

無断転載禁止

人口は約十万人前後になる。一家族3.6人で計算すれば，長陵県の戸数は約２万８千戸前後であることになる。これは信憑性の高い『漢書』地理志にある５万57戸の記載と合わない。

『漢旧儀』は「西京雑事」を記録する文献で，衛宏もしくは胡廣宏によって編纂された書物とされている。そのなかの記載は前後『漢書』の諸注に引用されており，ある程度の信憑性があるが，「原本転相伝写，節目淆乱，字句舛訛，殆不可韻」と評されている[12)]。『漢旧儀』にある漢首都圏周辺の人口に関する記載は数箇所ある。管見のかぎり，『漢旧儀』にある漢長安周辺の戸籍数に関する史料はほとんど『文献通考』に残され，全部で次の四つの記載がある。

史料１　漢興，立都長安。徙斉田・楚昭・屈・景及諸功臣家於長陵。後世世徙吏二千石・高貲・富人及豪傑兼併之家於諸陵。長陵邑万戸。（『文献通考』巻一二四引『漢旧儀』）

史料２　惠帝安陵・文帝霸陵・景帝陽陵邑各万戸，徙民與長陵等。（前掲『文献通考』巻一二四引『漢旧儀』）

史料３　太上皇万年邑千戸，徙天下民貲三百万以上，与田宅守陵。（『文献通考』巻一二四引『漢旧儀』）

史料４　武帝治茂陵，昭帝平陵邑，皆取二千石將相守陵。故三陵（文献の前後関係からみれば，もう一つの陵邑は宣帝の杜陵である）多貴。皆三万戸至五万戸。（『文献通考』巻一二四引『漢旧儀』）

まず，これらの記載のなか，いわゆる「節目淆乱，字句舛訛」の文字はなさそうである。第二に，『漢旧儀』の首都圏の戸籍数の記載に，いずれも「邑」というキーワードがあり，つまり『漢旧儀』に記録されている戸数は諸陵県の戸籍数ではなく，各陵邑の戸籍数であると認識できる。「一万戸」という数字は前掲した『長安志』引『関中記』に載せられている長陵の戸数と同じである。これは単なる偶然と思いたくない。『元和郡県図志』巻一の記載を参照すれば，『長安志』引『関中記』の「徙民置県者凡七，長陵・茂陵各万戸，餘五陵各五千戸，陵県属太常下隷郡也」の記載は陵県の戸数ではなく，陵邑の戸数である可能性があると推測する。ただ，『長安志』引『関中記』に文字の奪乱があるとおもう。つまり，長陵県の人口は漢末，17万９千4百69人（『漢書』地理志に記載されている数字）がいる。これに対して，長陵邑に約一万戸が住み，前述『漢書』地理志に記載された戸数と人口数で計算すれば，長陵地区においては，平均にして一戸に大抵3.6人がいる。この数字で計算すれば，長陵邑の住民は約３万６千人であった。

安陵・霸陵・陽陵　表１で示しているとおり

表１　『漢旧儀』などの文献に記載された諸陵邑の戸数

	『漢旧儀』	『関中記』	『元和郡県図志』	その他の記載
長陵	万戸	万戸	万戸	
安陵	万戸	五千戸	千戸	『関中記』によれば，「楽人」だけでも五千戸移民された。
霸陵	万戸	五千戸	千戸	
陽陵	万戸	五千戸	千戸	
茂陵	三～五万戸	万戸	万戸	『史記』呂不韋伝で「三万戸」とする，『黄図』で一万六千戸とする。
平陵	三～五万戸	五千戸	万戸	『史記』呂不韋伝で「三万戸」とする。
杜陵	三～五万戸	五千戸	万戸	『史記』呂不韋伝で「三万戸」とする。

無断転載禁止

であるが，諸文献に記載されている戸数はそれぞれ異なっている。安陵邑に関しては，『関中記』にある「五千戸」という記載は恐らく誤りがある。『長安記』引『関中記』にまだ「楽人」５千戸が安陵邑に移民された記載がある。『漢書』によれば，安陵の住民に「楽人」以外に，まだ著名な班氏・爰氏などの家族が居住していた。このため，安陵の人口は５千戸より上回るはずである。

茂陵

茂陵の人口数に関しては，三種の記載がある。まず，『三輔黄図』に

武帝茂陵在長安城西北八十里。建元二年初置茂陵邑，本槐里県之茂郷，故曰茂陵。周回三里。『三輔旧事』云，武帝於槐里茂郷徙戸一万六千，置茂陵。

とある。これと異なって，前掲『漢書』巻二八上地理志上に，

茂陵，武帝置。戸六万一千八十七，口二十七万七千二百七十七。

とある。さらに，前掲『史記』巻八五呂不韋列伝索隠引『漢旧儀』に，

宣帝元康元年起杜陵。『漢旧儀』武・昭・宣三陵皆三万戸。

とあり，前掲した『文献通考』巻一二四王礼考十八にも，

『漢旧儀』，武帝治茂陵，昭帝平陵邑，皆取二千石將相守陵。故三陵多貴。皆三万戸至五万戸。

とある。

普通，『三輔黄図』の「一万六千」は「六万一千」の誤りだと考えられ，『漢書』地理志にある記載は正しいとされている。しかし，前掲した茂陵邑と茂陵県の建設経緯からみれば，「一万六千戸」はおそらく茂陵邑の人口であると推測でき[13]，『漢旧儀』にある「三万戸至五万戸」という数字はおそらく漢末の茂陵邑の戸籍数と推測できるとおもう。『漢書』巻二十八上地理志上にある「茂陵」の戸数（６万１千87戸）は明らかに漢末のとき茂陵県の人口である。

平陵邑・杜陵邑　前掲史料４によれば，この二つの陵邑の戸籍数は３万戸から５万戸に達していた。同時に，表１で示しているように，両の邑の人口を「五千戸」，「万戸」とする記載もある。劉慶柱氏は杜陵に30万以上の住民がいたと推測している[14]。

２．文献にある前漢首都圏の人口密度

葛剣雄氏の研究によれば，前漢末期京兆尹の人口密度は一平方キロ約95.52人で，左馮翊の人口密度は一平方キロ約40.4人，右扶風の人口密度は一平方キロ約33.77人である。全国的にみればこの三つの行政区の人口密度は真定，済陰などの区域よりはるかに低い[15]。しかし，葛氏が指摘している京兆尹・左馮翊・右扶風（つまり広義の前漢首都圏）の人口密度は本文のいう前漢首都圏の人口密度を客観的に反映できないとおもう。

漢の長安城の人口密度については，馬先醒氏『漢代長安里第考』は「長安城の中で居住する人口は八万二千六十六人あり，平均して一平方里ごとに三百六十五人が居住している」と，先行研究を参照しながら漢の長安城の人口密度を言及している[16]。前述したように宇都宮清吉氏は漢の長安城に８万２千66人の都市住民が住んでいると考える。この８万人はおそらく城内の東北部に住んでいると考え，これらの都市住民が使える土地面積は約12平方キロ前後である。この二つの数値で計算すれば，漢の長安城の東北部で１平方キロ約６千８百30人前後が居住していたことになる。

考古調査によれば，長陵邑の平面は長方形で，南北2200メートル，東西1245メートルがあり，面積は約２.73平方キロである。そこに一万戸の人間が居住している。前掲した『漢書』地理志上の記録によれば，長陵県に「戸五万五十七，口十七万九千四百六十九」があり，一家族に約3.6人がいることになる。これを長陵の平均的一戸の人口数と仮定すれば（隠蔽人口の問題はここでは考慮しない），長陵邑に約一万戸，３万６千人前後が住んでいたことになる。

無断転載禁止

これで計算すれば，長陵邑の人口密度は一平方キロ約13186人前後である。一部の学者は前掲した『漢書』地理志上にある人口数は長陵邑の人口としている。それで計算すれば長陵邑で一平方キロあたりに約65749人前後が住んでいることになる。これはとても不自然である。

不自然というのは，まず上述した漢の長安城の人口密度と比べると，長陵邑の人口密度は異常に高く，これらの数値は現代西安の人口密度よりも遙かに高いためである。では，現代都市においては，都市の人口密度はいかがであろうか。

たとえば大阪市の南部にある住吉区の人口密度は一平方キロあたり約16670人前後である。これは世界有数の大都会の都心部の人口密度であり，そこに公園以外に，山林，田んぼなどの空間はほとんど存在しない。東京都の人口密度は一平方キロあたり約5446人である。東京都に都心部の人口密集地域以外に，もちろん山林，水域などの部分も含まれている。この分，人口密度は大阪市住吉区より低い。現代中国の場合，漢の長安城が位置する西安市の総面積は約9983平方キロある。そのなか，市街地の面積は約1066平方キロある。1986年の人口調査によれば，西安市の総人口は約654.78万人であり，市街地に住む人口は約303.31万人いる。これで計算すれば，西安市の人口密度は１平方キロあたり約656人で，市街地の人口密度は一平方キロあたり2845前後である。

現代的高層建築が多数あり，人口が立体的に分布する西安市や大阪市住吉区の人口密度と前掲した文献に載せている数字で計算して得た長陵邑の人口密度と比べると，前述した長陵邑の人口密度の値は不自然としか思われない。

安陵邑は長方形で，東西1548メートル，南北445メートルである。その面積は約0.68平方キロメートルである。前掲文献によれば，安陵には５千，もしくは一万戸の住民があり，一戸3.6人で計算すれば，つまり約18000から36000の人が安陵邑に居住していることになる。その最小値で人口密度の値を求めると，なんと人口密度は一平方キロごとに26470人という数値を得る。この数値ははるかに西安市の人口密度の値より大きい。諸陵邑の中，もっとも詳細に調査された杜陵邑は長方形の形をし，東西2100メートル，南北500メートルで，総面積は１平方キロ前後である。前掲『漢旧儀』の記載によれば，杜陵邑の戸数は３万から５万戸がある。その最小値の３万戸で計算すれば，杜陵邑に約10万８千人が居住している。一平方キロの範囲に10万人以上居住することになるが，これは明らかに異常である。

考古調査によれば，茂陵邑の範囲は東西1500メートル，南北700メートルである。総面積は約１平方キロ前後がある。もし前掲した『史記』呂不韋伝引『漢旧儀』の記載にある茂陵の戸数（諸記載で最も少ない）を茂陵の正確の戸数に近い数字とすれば，茂陵邑に約10万８千人が居住していることになる。つまり，茂陵邑の人口密度は一平方キロあたり約10万８千人という数値になる。この数値も異常な数字である。

諸文献に記載された数字と考古調査によって得た諸陵邑の面積で算出した各陵邑の人口密度はいずれも異常である結果になった。なぜこのような異常な人口密度の値が出たのであろうか。これを諸文献記載の誤りのせいだと解釈するのは簡単すぎる推測である。むしろ，これまで陵邑に対する認識に誤りがあると考えるべきである。これまで数多くの学者は「陵邑」というのはつまり諸陵を奉祀する集落を指し，その範囲は陵邑の城壁内であると考えているようである。上述した計算で得た諸陵邑の人口密度の値から，陵邑は各陵邑の城壁内を含める同時に，城壁外の一定の地域をその管轄内に置いていたと考えられる。上述した諸文献に記載されている各陵邑の戸籍数は各陵邑の城壁内に住む住民の戸籍数だけではなく，城壁周辺の中小集落の戸籍数の算入されている可能性が高い。

無断転載禁止

Ⅲ　前漢首都圏の集落分布

では，前漢首都圏主要都市の近辺，特に諸陵邑周辺に中小集落は存在していたのであろうか。『中国文物地図集・陝西省分冊』から多数の集落遺跡が確認できる。『中国文物地図集・陝西省分冊』によって表 2 を作成した（漢の長安城は表に入れていない）。

表 2　前漢首都圏内の集落遺跡

番号	遺跡名	場　所	時　代	出土物	遺跡面積（平米）	その他
		左馮翊（涇水以南）				
1	崖東遺跡	高陵県馬家湾郷米家崖村東	漢代	雲紋瓦当，縄文板瓦	115000	
2	陽陵故城	高陵県馬家湾郷米家崖北	漢代	「長楽未央」瓦当，板瓦など		
3	張家湾遺跡	咸陽市渭城区正陽郷張家湾村北	漢代	縄文板瓦など	8000	
4	四溝遺跡	咸陽市渭城区正陽郷張家湾村東北	漢代	筒瓦，板瓦など	10000	
5	費家崖遺跡	高荘郷費家崖村	漢代	縄文板瓦など	75000	
6	徐家寨遺跡	咸陽市渭城区正陽郷張家湾村西北	漢代	縄文筒瓦，雲紋瓦当など	15000	
7	史村遺跡	咸陽市渭城区韓家湾郷史村北	秦～漢	縄文板瓦，瓦当など	42000	
8	馬家堡遺跡	咸陽市渭城区韓家湾郷馬家堡村西北	漢代	縄文板瓦など	40000	
9	長陵邑遺跡	咸陽市渭城区韓家湾郷怡魏村	漢代	城壁，斉式瓦当など		
10	後排遺跡	咸陽市渭城区正陽郷後排村北	漢代	縄文板瓦など	37000？	
		京兆尹				
11	新寺遺跡	西安市灞橋区新築郷新寺村西	漢代	版築遺跡，各種建築材残存	30000	宮殿建築？
12	新光遺跡	西安市未央区譚家郷新堡村西北	秦～漢	大型版築遺跡，板瓦など	50000	
13	趙南遺跡	西安市未央区譚家郷新堡村東	漢代	縄文筒瓦，板瓦など	15000	
14	李家街遺跡	西安市草灘鎮李家街村	漢代	縄文筒瓦，玄武瓦当など	不明	
15	紡四路遺跡	西安市灞橋区紡織城	戦国～漢	竪穴倉庫，瓦など	13000	
16	高楼村遺跡	西安市新城区高楼村西北	新石器～漢	漢代の窯，建築材など	12000	
17	田家湾遺跡	西安市等駕坡田家湾村西	新石器～漢	漢代の板瓦など	40000	漢代の遺物は少ない
18	馬騰空遺跡	西安市等駕坡馬騰空村	新石器～漢	漢代の縄文板瓦など	60000	漢代の遺物は少ない
19	春臨遺跡	西安市曲江郷春臨村東	漢代	長楽未央瓦当など	不明	窯遺跡？
20	李家村遺跡	西安市碑林区李家村	漢代	縄文板瓦など	不明	
21	渠北遺跡	西安市碑林区雁塔路	漢代～宋	漢代の縄文板瓦など	数万	
22	瓦胡同遺跡	西安市碑林区雁塔路	漢代	版築遺跡	数万	
23	杜県故城	西安市碑林区山門口沈家橋村東北	戦国～北周	縄文瓦，縄文磚など	不明	
24	魚化寨遺跡	西安市碑林区魚化寨村西北	新石器～漢	漢代の縄文板瓦など	75000	
25	影山楼遺跡	西安市蓮湖区曹家堡村南	漢代	版築建築遺跡，粗縄文板瓦など	不明	
26	藺高遺跡	西安市三橋鎮藺高村西	戦国～漢	版築建築遺跡，陶製下水管など	不明	

無断転載禁止

27	火焼寨遺跡	咸陽市灃東郷火焼寨村北	秦～漢	縄文板瓦，筒瓦など	8000	
28	老戸寨遺跡	咸陽市灃西郷老戸寨村	秦～漢	五角下水管，縄文瓦など	不明	
29	田家堡遺跡	咸陽市灃西郷田家堡村東	秦～漢	縄文筒瓦，板瓦など	200000	
30	馬寨遺跡	咸陽市釣台郷馬家寨村西北	戦国から漢	陶製水管など	200000	
31	西張遺跡	咸陽市釣台郷西張村	漢代	「上林」瓦当一点および建築材残留	不明	上林関係の遺跡？
		右扶風				
32	楊新荘遺跡	咸陽市渭城区韓家湾郷楊新荘村北	漢代	縄文板瓦，筒瓦など	45000	
33	岳家荘遺跡	咸陽市渭城区韓家湾郷岳家荘村北	漢代	版築遺跡，縄文板瓦，筒瓦など	1500000	
34	北村遺跡	咸陽市渭城区韓家湾郷白廟北村北	漢代	縄文板瓦，瓦当など	150000	
35	南村遺跡	咸陽市渭城区韓家湾郷白廟南村東	漢代	縄文陶製井圏，縄文瓦など	3000	
36	安陵邑遺跡	咸陽市渭城区韓家湾郷白廟南村南	漢代	城壁，瓦当など		
37	聶家溝遺跡	咸陽市渭城区窯店郷聶家溝村北	新石器・漢	漢代の陶器，瓦など	不明	
38	毛王溝遺跡	咸陽市渭城区毛王溝村東	漢代	板瓦，陶製井圏，馬蹄金，文帝半両など	100000	秦の咸陽宮の範囲内にある
39	何堡遺跡	咸陽市渭城区渭城郷何家堡村南	漢代	縄文板瓦，筒瓦など	240000	
40	瓦劉遺跡	咸陽市渭城区底張郷瓦劉村東	漢代	縄文瓦	不明	
41	底張湾遺跡	咸陽市渭城区底張湾底張湾村北	漢代	縄文瓦など	不明	
42	崔家村遺跡	咸陽市渭城区周陵郷崔家村東南	秦～漢	版築遺跡，縄文板瓦，筒瓦など	40000	
43	李家寨遺跡	咸陽市渭城区周陵郷李家寨村西	秦～漢	縄文板瓦，「千秋万歳」瓦当など	40000	
44	黄家寨遺跡	咸陽市渭城区周陵郷黄家寨村	漢代	円形水道管，菱形空心磚など	不明	
45	下原遺跡	咸陽市渭城区渭陽郷下原村	漢代	版築遺跡，窯遺跡など	1200	
46	七結遺跡	咸陽市秦都区馬荘郷七結村	漢代	縄文板瓦など	18000	
47	時家村遺跡	咸陽市秦都区双照郷時家村北	漢代	縄文板瓦，筒瓦など	60000	
48	府陽遺跡	咸陽市秦都区双照郷府陽村南	漢代	雲紋瓦当，縄文板瓦など	不明	
49	西石遺跡	咸陽市渭城区周陵郷西石村	漢代	磚，瓦など	不明	
50	東石遺跡	咸陽市渭城区周陵郷東石村	漢代	縄文板瓦，筒瓦，瓦当など	20000	
51	老戸寨遺跡	咸陽市渭城区周陵郷陳老戸寨村北	漢代	縄文磚など	30000	
52	石斗遺跡	咸陽市秦都区古渡郷石斗村	漢代	縄文板瓦，「長生未央」瓦当など	不明	
53	龐東遺跡	咸陽市秦都区双照郷龐東村南	漢代	縄文板瓦，筒瓦など	750000	
54	平陵邑遺跡	咸陽市秦都区平陵郷李都村付近	漢代	陶器，骨器，銅器など	不明	
55	李都遺跡	咸陽市秦都区平陵郷李都村内外	漢代	版築遺跡，縄文板瓦，筒瓦など	不明	

無断転載禁止

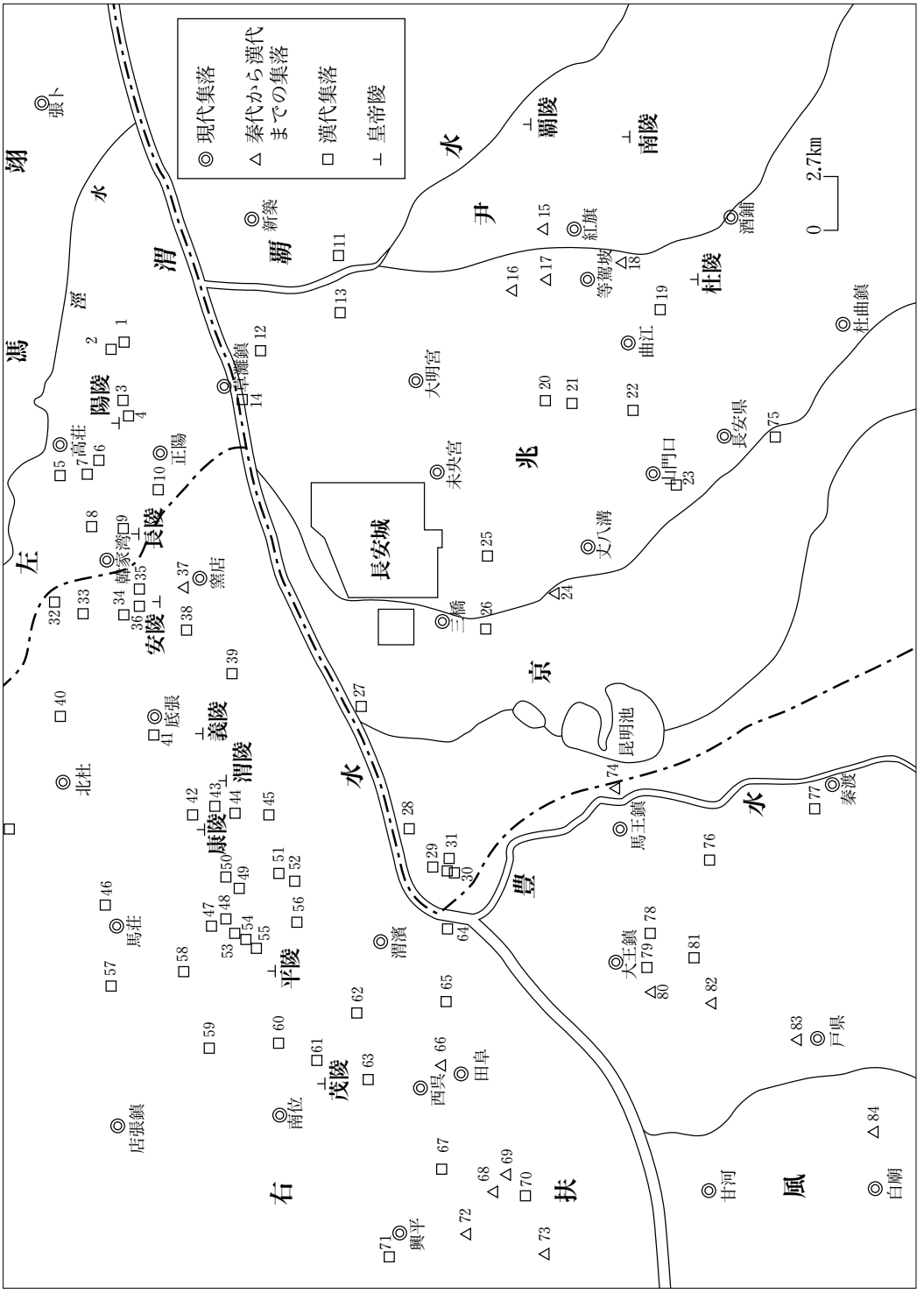
56	下底王遺跡	咸陽市秦都区平陵郷下底王村北	漢代	縄文板瓦，筒瓦など	54000	
57	西正洪遺跡	咸陽市秦都区馬荘郷西正洪村西南	漢代	縄文板瓦，筒瓦など	25000	
58	双照城遺跡	咸陽市秦都区双照郷双照村	漢代	版築城壁遺跡，建築材など	16000	
59	白良遺跡	咸陽市秦都区平陵郷白良村北	漢代		不明	詳細は不明
60	宇家荘遺跡	興平県南位郷宇家荘南	漢代	縄文板瓦，雲紋瓦当など	1500000	
61	道常遺跡	興平県南位郷道常村北	漢代	灰陶釜など	不明	詳細は不明
62	北荘上遺跡	咸陽市秦都区馬泉郷北荘上東	漢代	縄文板瓦など	40000	
63	北呉遺跡	興平県西呉郷北呉村	漢代	縄文筒瓦，「加気始降」瓦当など	不明	
64	過唐遺跡	咸陽市秦都区渭浜郷過唐村南	漢代	縄文板瓦，路土など	不明	
65	西大寨遺跡	咸陽市秦都区渭浜郷西大寨村北	漢代	縄文筒瓦，板瓦など	30000	
66	小寨遺跡	興平県田阜郷小寨村北	秦～漢	縄文筒瓦，板瓦など	100000	
67	正東遺跡	興平県田阜郷魏家村正東村西	漢代	雲紋瓦当など	75000	
68	南佐遺跡	興平県阜寨郷南佐村東	秦～漢	縄文板瓦など	2000000	犬丘の旧跡とされている
69	楊家村遺跡	興平県阜寨郷大金家村南	秦～漢	縄文板瓦，筒瓦など	20000	
70	東故寺村遺跡	興平県阜寨郷東故寺村西	漢代	縄文筒瓦など	40000	
71	薬市遺跡	興平県冉荘郷薬市村北	漢代	縄文瓦など	7200	
72	恵址坊遺跡	興平県恵址坊村北	秦～漢	縄文筒瓦，板瓦など	150000	
73	法震遺跡	興平県荘頭郷法震村東	新石器・漢	漢代の縄文瓦，磚など	2500	
74	客省荘遺跡	長安県馬王鎮客省荘村	新石器・漢		不明	漢代遺跡の詳細は不明
75	皇甫遺跡	長安県皇甫郷皇甫村東	秦～漢	縄文板瓦など	不明	
76	董村遺跡	戸県蒼遊郷董村西	漢代	縄文板瓦，筒瓦など	10000	
77	閻花園遺跡	戸県牛東郷閻花園村東	漢代	縄文筒瓦，板瓦，人骨など	4000	
78	卓日遺跡	戸県大王鎮卓日村西	漢代	縄文板瓦など	2000	
79	王守遺跡	戸県大王鎮王守村東北	漢代	縄文板瓦など	5000	
80	什王遺跡	戸県蒼遊郷什王村西北	新石器・漢	漢代板瓦など	80000	漢代の遺物は少ない
81	牙道遺跡	戸県蒼遊郷牙道遺跡西北	漢代	弦紋罐など	5000	
82	東羊遺跡	戸県光明郷東羊村南	漢代	縄文板瓦など	20000	
83	東韓遺跡	戸県光明郷東韓村南	秦～漢	粗縄文板瓦など	60000	

また，『中国文物地図集・陝西省分冊』の各図により，「前漢首都圏集落遺跡図」を作成した。この図から，漢の長安城周辺，特に諸陵邑周辺の中小集落遺跡の分布状況がビジュアル的に把握できる。諸遺跡のなか，もっとも注目すべきは図１の54番の平陵邑遺跡である。平陵邑遺跡の周辺３キロの範囲内に，中小集落遺跡が七ヶ所もある。この七ヶ所の「隣里相望，鶏犬相聞」の集落は恐らく平陵邑が所轄する七つの里で，これらの遺跡にかつて住んでいた住民の数も平陵邑の住民として計算され，諸文献に記載されたのではないかと推測する。このような推測を証明するにはさらに詳細な考証が必要である。陵邑とその周辺の中小集落の関係の詳細について，今後研究の課題にしたい。

図１の「漢首都圏周辺の集落」から，前漢首都圏の人口分布の特徴をまとめることもできる。図で示したように，前漢首都圏の中心都市

無断転載禁止

図1　漢首都圏周辺の集落[17]



――長安城の周辺には，中小集落がそれほど多くはない。その原因は，漢の長安城の南部は国家祭祀建築が集中していた地区で，官的に使われた建築や土地が多く，漢の長安城の東南部は呼林貴氏が指摘しているように，漢の長安城の住民の墓葬が集中しているところであり，漢の長安城の東側については，都市を拡大するための予備用地で，集落遺跡は少ない。漢の長安城の北側は地形が低く，地下水の水位が高く，集落建設には相応しくない場所である。長安城の西側，三橋・丈八溝以西，今戸県の馬王鎮・秦渡鎮以東の地域には上林苑があり，当然，集落はこの地域で建てられない。

前漢首都圏で集落がもっとも多い（言い換えれば，人口がもっとも多い）地域は渭水の北岸の黄土台地の上である。前掲『漢書』地理志の記載によれば，茂陵の人口は長安の人口より多く，長陵も非常に多い人口を有する。文献から，この地域は前漢首都圏の人口中心であることがうかがえる。考古調査の結果はこの地域に中小集落が密集し，前漢首都圏の人口の中心はこの地域にあるということを証明した。

今の紅旗・等駕坡・曲江・山門口一帯も数多くの漢代集落が発見され，ここも前漢首都圏の人口中心の一つであることを示しているが，現代の西安市に覆われ，これ以上の遺跡の発見は困難である。

おわりに

以上の史料・遺跡の分析から，次の結果及び問題点が得られる。

まず，前漢首都圏の中心都市は漢の長安城であるが，人口の中心は漢の長安城ではなく，渭水北岸の台地に位置する諸陵の周辺である。このような状況は漢の長安城の性格を示している。つまり，漢の長安城は政治的な都市，もしくは宮殿的な都市の性格を持っている。極言すれば，漢の長安城の性格は戦国時代の東方諸国の都の宮城に類似する部分がある。

第二に，宇都宮清吉氏，佐藤武敏氏などの研究ですでに指摘しているように，前掲『漢書』地理志に記載されている前漢首都圏の戸数は城内住民の数ではなく，それぞれ長安県，長陵県，茂陵県の人口数である。『漢旧儀』や『関中記』に記載されている諸陵の人口数は諸陵県の戸数ではなく，各陵邑の人口数である。

第三に，これから検討すべき問題点として，まず陵邑と陵県の関係をさらに検討する必要があるとおもう。同時に，陵邑とその周辺の集落の関係を究明することによって，前漢時期の集落の形態だけではなく，前漢の行政制度，社会構造のいくつかの側面の研究にも有益であるとおもう。

第四に，史料によれば，諸陵周辺の地域においては，「土厚水深」，飲用水問題の面からみれば，集落建設の立地条件からみれば，この地域は決していいとはいえない。当時，どのように用水問題を解決したのか，これは漢の長安城の興亡にどんな関係をもっているのか，この問題は前漢首都圏研究で，解明すべき問題の一つである。

注

1）劉慶柱「西安龍首原漢墓甲編序」西安文物保護考古所編著『西安龍首原漢墓甲編』西北大学出版社，1999年12月，1ページ。

2）佐藤武敏『長安』近藤出版社，1971年11月，63ページ。

3）劉慶柱『長安春秋』人民出版社，1988年，71ページ。

4）同上，劉慶柱『長安春秋』。

5）張永禄『漢長安城辞典』陝西人民出版社，1993年。

6）『太平寰宇記』巻二六に，「安陵故邑，周之程邑。漢為県，惠帝置。『周書』曰，惟王季宅於程。『孟子』曰，文王卒於畢郢，即此地也。」とある。

7）史念海主編『西安歴史地図集』西安地図出版社，1996年。

8）劉慶柱『西漢十一陵』陝西人民出版社，1987年。

9）西安市文物保護考古研究所編著『西安龍首原漢墓甲編』西北大学出版社，1999年12月，3ページに，「按《汉书・地理志》载，西汉末年平帝元始二年（公元2年）长安城有户八万八百，口二十四万六千

無断転載禁止

二百。平均每户三人，显然偏低，可能这是交纳租税的编户的数字，若按每户五口计，再加上皇戚贵族、军队僮仆等、全城人口至少也有四五十万之多。」と書いてある。これによれば，前掲した『漢書』地理志にある“户八万八百，口二十四万六千二百”という記載は長安県の総人口ではなく，長安城の中に生活する住民の人口数である。

10）馬先醒『簡牘論集』簡牘社，1977年，204ページ。

11）前掲，劉慶柱『西漢十一陵』，23ページ。

12）『四庫全書総目』巻八六。

13）葛剣雄氏は一万六千戸を茂陵建設当時の人口数とし，六万一千を漢代末期の人口数としている（葛剣雄『西漢人口地理』人民出版社，1986年，138ページ，本文で引用された葛氏の意見はほとんどこの著書から引用している）。

14）前掲，劉慶柱『西漢十一陵』，102ページ。

15）前掲，葛剣雄『西漢人口地理』，96ページ。

16）前掲，馬先醒「漢長安里第考」（『簡牘論集』，209ページ）。

17）図１は，史念海氏主編『西安歴史地図集』，61ページ「西漢諸帝陵墓分布図」をベースに，『中国文物地図集・陝西省分冊』（国家文物局主編，西安地図出版社，1998年）の西安市各区，長安県，涇陽県，戸県，咸陽市秦都区，咸陽市渭城区などの相関遺跡図を参照して作成した。各図の縮尺はそれぞれ違うので，まずいくつかの現代集落を図上に描き，これを基準にして各遺跡までの距離と方角を測り，各遺跡を図上に標記した。このため，各遺跡の位置の正確度は低い。図上の記号について，「□」は漢代の集落，「△」は秦代から漢代の集落「◎」は現代集落，「⊥」は皇帝の陵墓である。

（2002年７月19日受付）

無断転載禁止